

男一人で、女性に混じって福祉ボランティアを牽引

活動地域（岡山県里庄町）

男性のプロフィール

氏名：青木 耕治さん

年齢層：高齢者層（60歳以上）

活動概要：高齢者・障がい者支援のボランティアの代表を務めるほか、女性中心の子育て支援や中学生ボランティア育成の活動に唯一人の男性として参加している。

活動開始のきっかけ

仕事でお世話になった福祉の現場に恩返し

新聞記者生活37年。「リタイアしたら、恩返しのため、これまで取材してきた福祉の現場でボランティアをしたい」と思い続けてきました。嘱託期間満了後、最後の勤務地に近い岡山県里庄町に住み、知り合いの町議に会った際、自身が所属するボランティア団体に勧誘されたことが始まりです。

老人保健施設で毎週、主にシーツ交換をしている「里庄町ボランティアすみれの会」で、会員60人。男性が入るのは初めてでした。ピンク色のユニホームと白いズック靴を支給され、女性に混じって活動を始めました。

その後、車いすの清掃奉仕などを行っている中学生の「チョボラ・ジュニアの会」、未就学児童と母親たちの受け皿となる「フレンズ」の会員にもなりました。

それぞれ入会して4年になります。もともと人見知りや気後れするタイプではなく、いずれの会も男性会員は私一人ですが、十分に溶け込んでいると自負しています。ただ、男女共同参画社会という考え方が広まっているものの、私の同級生に福祉ボランティアをしている仲間はいません。ピンクのエプロン姿や赤ちゃんを抱いてあやすのを恥かしいと思ったら、できない仕事でしょう。

活動の内容

創立20周年の記念事業で講演会を企画

「すみれの会」では、平成23年度から私が会長を務めており、これまでのシーツ交換のほかに、別の施設で傾聴ボランティアの取り組みを始めました。お年寄りと言らい、昭和の懐メロを歌いあっています。また、平成24年度は創立20周年で、記念事業として10月に認知症の専門医による講演会を企画しています。「節目の記念事業でステップアップを」との思いから、役員の同意を得て、実現することになりました。

「フレンズ」も設立10周年記念で、会の新聞を発行することになりました。元記者のスキルを生かし、お手伝いするつもりです。

◇活動内容◇

○すみれの会（平成4年発足）

町の老人保健施設「里見川荘」で毎週水曜日にシーツや布団カバーを交換するほか、敬老会や夏祭りなどで芸能を披露している。

○フレンズ（平成14年発足）

週3日、町の老人福祉センターに子どもと保護者が集まり、情報交換し、悩みを話し合う。その間、ボランティアが子どもの面倒を見る。



○チョボラ・ジュニアの会（平成5年発足）

里庄中学校の生徒約100人が、「里見川荘」で第2土曜日に、車いすや風呂の清掃、入所者との触れ合い活動などを行う。大人のボランティアがサポートする。

高齢者世代との触れ合いから、生きがいを感じる

「すみれの会」でシーツ交換や敬老会を通じてお年寄りと触れ合うことは、自分自身にとっても、生きがいを見つけることにつながっています。昨年からは、別の老健施設のお年寄りを対象に傾聴ボランティアを実施しており、月2回、施設を訪れ、お年寄りと語り、懐かしい童謡や流行歌を歌っています。また、「フレンズ」での活動では、私が抱くと泣き止む赤ちゃんもいて、「夫が抱くと泣くのに、青木さんに抱いてもらおうと笑ってる」と不思議がるお母さんもいらっしゃいます。にこっと笑ってもらえると、ボランティアをしていることにこの上ない喜びを感じます。

周囲との関わり

同世代だから共通の話題と歌がある

活動を通じて、赤ちゃんからお年寄りまで、多くの人との触れ合いがあります。「すみれの会」で行う月2回の傾聴ボランティアでは、若いヘルパーさんは昔の話題や歌についていけませんが、我々は同世代。大いに盛り上がります。「フレンズ」では、クリスマスや雛祭りなどの飾りも、牛乳パックなどで手作りします。パックを解体するのが私の仕事です。「チョボラの会」では、中学時代の経験を生かして卒業後にヘルパーになった女生徒がおり、子どもたちも確実に成長してきていると感じています。今後も地域の子どもたちを見守りながらの奉仕活動に喜びを見出ししていきたいと思っています。

直面した課題と解決方法

会議は意見百出でまとまらないが、これこそ男女共同参画社会

すみれの会では、「敬老会」で踊りや歌を披露することも活動の一環であり、会員はこれまで、こちらにも参加してきました。「シーツ交換はともかく、踊りはちょっと」という人も多く、退会する原因にもなっていました。平成24年度からは気軽に参加してもらえるようにと、各班ごとに決めた踊りや歌のパフォーマンスに参加したくない人は、参加しなくてもよいことにする方向で調整しています。

また、バラエティに富んだ意見が百出するため、会議をしてもまとまらず、結論がなかなか出ません。一直線に結論を出して仕事を進めてきたサラリーマンの経験からみると、忍耐が必要なところがあります。特に、傾聴ボランティアや記念講演など新規事業に乗り出そうとした時には、かんかんがくがくの議論がありました。しかし、皆で議論するからこそ、議論の幅が広がり、ユニークな発想やアイデアが生まれます。だから、議論のときにはじっくり構えた上で意見を調整することにしています。

これからの展望

男性側が活動の輪の中に積極的に飛び込むことが大切

先日、町が60歳を迎えた百数十人の方を対象にセカンドライフの説明会を開き、シルバー人材センターやボランティア団体の活動を紹介したのですが、説明会に参加したのは女性20人、男性10人。各種団体に新規入会する人も、まだ現れていません。すみれの会の会長としては、創立記念事業を成功させ、これらの人たちに参加を呼びかけていくつもりです。

これからの時代は、女性社会に、男性が積極的に入り込み、女性の指導を受けながら、ともに歩いていくという姿勢でなければ、超高齢社会は乗り切れないと思います。幸い私は、いくつかの団体に属し、男性はたった一人なのに、女性の輪の中に入って活動できています。男性へのアドバイスは、サラリーマン時代のように高ぶることなく、とにかく輪の中に飛び込め、です。